

やくそく

武田こうじ

すいへいせんを
ゆびでなぞって
ほんやりと
リダイアルした

すぐそこなのに
とおいかこ

ほしはくりかえし
やってくる
ほんとうのことを
なかなかいえない
ぼくたちのかなたに

あいして
あきらめて
なぐさめて
といかけて
このうみに
ただいま
おかえり



この地域を 知るための メモ

仙台市若林区 荒浜地区

3·11
その時
大震災の当日、4階建ての荒浜小学校にはその児童と周辺の地元住民が避難。しかし、津波は容赦なく校舎を襲い、2階まで浸水した。荒浜小学校の再開の目処は立っておらず、現在児童たちは東宮城野小学校の校舎を間借りして授業を受けている。

仙台市が配布していた「津波避難マップ」には、県道10号線まで津波が到達することは想定されておらず、県道を西側へ渡って安心しきっていたところで津波に襲われた住民も多いという。

荒浜地区的住民は、住み慣れた住宅も、先祖の代から大事に守ってきた田畠も、暮らしの一部だった漁船も、この度の津波によって失うこととなった。

仙台市民にとって、「荒浜」は「深沼海水浴場」としてなじみ深いところです。貞山堀にかかる深沼橋を渡り、はやる気持ちで松林をくぐると、白い砂浜と青い海がぱっと広がる。夏の日差しの下で感じた汐の匂いと海風を、深刻な津波被害の報道の中で思い起こした人も多かったでしょう。すでに昭和の初めには、夏になると30分に1本のバスが、大勢の海水浴客を深沼へ運んだといいます。

荒浜とも深沼ともよばれる地区ですが、「深沼」という地名は、もともとここにあった沼に由来するようです。明治38年（1905）頃の地形図を見ると、確かに集落の北側には貞山堀に接して小さな沼が記載され、集落には「荒浜」「深沼」と2つのよび名が記され

ています。明治17年製作の「輯製二十万分の一図」には、北に深沼、やや南に「荒浜」と別々の集落として描かれていますから、2つの集落が大きくなり区別がなくなっていました。

荒浜に人が住み着いたのは江戸時代初頭のことです。地元には、越中大学、但馬掃部、土佐十郎右衛門という3人の落ち武者が、荒れたこの地にたどり着き、開墾しながら小さな網で漁を始めたという言い伝えがあります。この地は慶長16年（1611）の大津波でも被害を受けましたが、新田開発という藩の政策のもと、人々は塩をかぶった湿地を鍬と人力で青々とした水田に変えてきました。

ここはどういう場所で、どんな暮らしがあったのだろう
地域資源を再発見／再認識／再考する

RE:
プロジェクト
通信



海のある暮らしに生きる

1

その一方、荒浜の人々は、目の前に広がる海に船を繰り出し漁業に生きてきました。波が荒く、砂浜が続くため船を係留できる港がない漁には不向きの環境でしたが、人々は波を切り分けて進む「エグリガッコ」という舳先のとがった和船を開発し、地引網や定置網などさまざまな漁法を駆使し漁を続けてきました。

江戸時代中頃に出版され、生き生きとした絵と文で奥州の名所を紹介した「奥州名所図会」には「深沼 地引網」のページがあり、松林の砂浜で漁獲を待ち受ける人々を前に懸命に網を引く人々の姿が描かれています。

「この浜漁獵の地なり 四月より六月の上旬まで地引す 仙府とその間遠からずによりて 府中よりも見物の男女群衆す 漁中日々府中へ往還絶える時なし 頗る繁盛の地なり」

【参考文献】

- ・宮城県史編纂委員会編『宮城県史 風土記御用書出 24 資料篇2』宮城県、1954年
- ・仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編7 近代2』仙台市、2009年
- ・仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編6 民俗』仙台市、1998年

・(有)タス・デザイン室編『ふるさと七郷 もうひとつの仙台』(有)タス・デザイン室、1993年

添えられた説明の文からは、春から初夏にかけて見物人を集めほどに活気づいた浜のようすと、魚をかついで城下町へと急ぐ荒浜街道のにぎわいが見えるようです。

明治初期の船の数は67艘、昭和元年（1926）には37艘。昭和の時代、動力船が塩竈港に拠点を移したとともに、昭和30年代まで砂浜には和船の並ぶ風景がありました。荒浜は明治22年（1889）には七郷村となり、昭和16年（1941）に仙台市となります。100万都市の片隅にあってなお漁業はこの地に息づいています。数年前にNHKのドキュメンタリー『イナサ 風と向き合う集落の四季』として放映されたので、その暮らしぶりを共感を持って見た方も多いかもしれません。

この大震災の中、漁業に生きてきた方はどんな日々を過ごされているのか。その思いをうかがいました。

編集後記 |

「RE:プロジェクト通信」の第1号は、震災直後から被害が大きく伝えられている多くの仙台市民にとって海水浴場とし、獲れた魚を分け合ってきたこと。勢いよく楽しげに当時の漁の様子を語る漁師さんの姿からは、海のある暮らしを通じて育まれた絆を感じました。

多くの仙台市民にとって海水浴場として特別だった海も、そこで暮らしてきた方々にとって生活する場であり、地域の絆を育んできた場です。かつては人力で船を沖から引き上げていたため、男女の別なく手伝ったこと。豊漁となれば喜びをともに

そうしたかつてのこの地域の姿を、もう一度目で見ることを願ってやみません。（田）

『RE:プロジェクト通信』第1号 2011年9月発行

【主催】仙台市・財團法人仙台市市民文化事業団

【編集・発行】財團法人仙台市市民文化事業団 事業課事業企画係

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 TEL:022-301-7405/FAX:022-727-1874/info@sendaicf.jp

次回は
10月中旬に
発行予定です。
ウェブサイトも
ぜひご覧ください。

◆ウェブサイト
<http://www.sendaicf.jp/contents09.html>

◆ツイッターアカウント: RE_project



※この紙はリサイクルできます。